



ザンビアの子どもたちへ送るメッセージを考える陽明高校の生徒たち。離れていても、つながることができる方法を知った



ザンビアの食文化について伝える友寄先生。「貧困や感染症といった深刻な問題ばかりでなく、沖縄との共通点や魅力的な文化があることを伝えたい」



JICA沖縄主催で毎年行われる「おきなわ国際協力・交流フェスティバル」では、授業で学んだことを発表

新しい街は 隣人を傷つけていた？

「サバイディー！」

元気なあいさつとともに登場した男性を興味津々な表情で見つめるのは、沖縄県浦添市にある沖縄県立陽明高等学校の2、3年生。「ラオス語で、こんにちは、という意味なんですよ」。青年海外協力隊OBの神田青さんが、優しく教えてくれた。

この日、高校から車で10分ほどのJICA沖縄を訪ねた高校生たち。6つに分かれたグループごとに手渡されたのは2枚の紙。1枚には真ん中に青い池が、もう1枚には家や学校、工場、畑などが描かれている。



6グループがつくった「街」を並べてみると…

世界とつながる 教室

足元を見つめ、 未来につながる授業を

世界に目を向け広い視野を持てる人材を育てようと、「国際理解」の授業を実施している沖縄県立陽明高等学校。JICAの出前講座や教師海外研修などを活用しながら、主体的に行動できる生徒を育てている。

「畑は郊外かな」「浄水場も必要だね」。神田さんが準備した紙を使って建物や施設の配置を考える



「それを使って、グループごとに街をつくってみよう」。突然の指示に少し戸惑いながらも、作業に取り掛かる。家の絵を切り取って池の右端に貼ったりしながら、「学校と病院は家から近い方がいいよ」「工場は住宅地から遠ざけよう」と、思うがままに新しい街をつくり始めた。

作業時間は20分。その後、各グループの代表が「市長」として、それぞれの構想を発表することになった。「ニンジンが特産物だから、キャロットシティーと名付けました」「観光地にして、外から人を呼びたい。どれも夢にあふれたものだった。

全ての発表が終わった後、何やら陰しい顔で絵を並べ始めた神田さん。6枚を横につなげてみると、なんと一本の大きな川になった。

「実は、この池はつながっていたんです」。神田さんは、隊員時代の出来事を語り始めた。ラオスではメコン川の上流に造ったダムによって周辺地域の人々の生活が豊かになった一方、下流に暮らしていたカンボジアやタイの人々の生活は、水が枯れ、立ち行かなくなってしまう。「目で見える範囲の外にある物事も想像できるようにするのはいいと思います」。

何げない気持ちで始めたまちづくり。神田さんの話を聞いて、シヨックを隠し切れない表情を見せる子も。工場を住宅から遠ざけたり、欲しいものだけ

を家の近くに置いたりしたけれど、それが別の地域の人に迷惑をかけていたかもしれない。2年生の友利健人さんと城間有貴さんは「自分たちのことしか考えていなかったのかも」と話していた。

世界に目を向ければ 進む道も見えてくる

「Think Globally, Act Locally」。陽明

高校の選択科目「国際理解」の授業のモットーだ。この授業を担当するのが今回の訪問学習の仕掛け人、友寄美恵子先生だ。物事をグローバルに考え、自分の足元から行動してほしい。そんな思いを持ち始めたのは、今から5年ほど前。赴任したばかりのころ、開発途上国を含む世界100カ国で同時開催される「世界一大きな授業」に参加し、開発教育の存在を知った。「アジアや南米を旅行したとき、幼い子どもたちが働いているのを見て、世界の現状を教え子たちに話さなければと思っていました。それまで英語の教員として欧米の文化を伝えることはあっても、途上国に触れる機会はほとんどなかったんです」。

そこで2009年から、学校ぐるみでJICA沖縄のプログラムをフル活用。2012年から2年間は、沖縄県の国際理解教育研究指定校になった。友寄先生もJICAの教師海外研修でザンビアを訪ね、帰国後は現地で見



南太平洋地域出身のJICA研修員と交流

たことをふんだんに盛り込みながら、アフリカを身近に感じてもらえるような授業づくりに奔走している。

「将来は、貧しい子どもたちのための施設を開き、経営者になりたい」と夢を語る高校生もいる。2年生の島袋りおなさんは、JICAと沖縄県の連携事業「おきなわ国際協力人材育成事業」を通じてバングラデシユを訪ね、協力の活動や日本人が運営するNGO施設などを見て回り、人生の目標を見つけた。

「生徒全員が、将来海外で活躍する必要はないのです。授業を通じて世界のこと、自分の立ち位置を知れば、進む道も見えてくるはず」。友寄先生は、そんな気持ちで今日も、日本の教室から世界に思いをはせる。